

平成 21 年度伊川津貝塚調査の概要

田原市教育委員会

伊川津貝塚の概要

貝塚は伊川津集落の中にあり、神明社境内を中心として、南北 60 m 東西 180 m に広がる、縄文時代後期末から晩期の東海地方屈指の大貝塚である。明治 36 年（1903）から、発掘調査が行われ有名な考古学者、人類学者が伊川津の地を訪れた。伊川津貝塚で有名なものは 1904 年に発見された「有髯土偶」で、「ヒゲ（髯）」のある土偶として、当時の人種論争に活躍したもので、又状研歯がほどこされた頭骨も有名である。明治時代より学会に話題を提供し、吉胡貝塚と同様に、多くの埋葬された縄文人骨が見つかり、又状研歯頭骨をはじめ縄文時代の独特のイメージを植え付けた重要な貝塚である。特に残りの良い神明社境内東側の一部は県指定史跡（昭和 49 年 10 月 9 日指定）となっている。

調査の経緯

農業集落排水泉北部地区（その 2）工事に伴い、下水道管敷設に伴い工事で壊される遺跡の範囲（面積 85 m² 管路+マンホール部分 0・A・B 区）で調査を行い、管路の延長 70 m（C・D 区）、マンホール 1 箇所の立会いを行った。調査対象面積は 165 m² である。場所は伊川津漁協の西方面の道路で、伊川津貝塚の西端を知る上で重要な場所である。

期間は 9 月 28 日から 10 月 31 日、立会調査は 11 月 25 日にかけて工事の進行状況に合わせて行っている。

成果の概要

調査対象区域には、すでに地下埋設物でかく乱されている場所もあった。調査区内には古い水道の埋設、ほぼ並行するように近年の水道の堀方がある。水道の堀方は砂で埋め戻しが行われているので、調査区と近接、一部重なったところでは崩落してしまい極めて危険な状態であった。したがって調査方法、記録にはおのずと制限があった。縄文時代の貝層は 0 区中央、B 区から D 区の東端（かく乱でプライマリーか不明）に存在した。時期は晩期後半のものである。

0 区では、調査区中央で、大きな掘り込みがみられる。古代の遺物を含む貝層も存在する。

南半分には晩期後半貝層が残存している。南端は基盤の砂礫層がマウンド上に盛り上がっている。これは基盤の砂礫が海進によって形成された東西に走る浜堤と思われる。特殊な遺物として、人工品かは議論の必要があるが、貝合わせの中に貝を入れたものが 4 点見つかった。これは、吉胡貝塚でも見つかりしている。土器は縄文時代晩期後半のものばかりである。土偶が 1 点出土している。埋葬イヌ 1 体が出土している。古代の掘り込みや、近世の再堆積した貝層が存在した。ピット、土坑はあるものの、明確な遺構は少ない。

0 区に接続する 2034-1-1 マンホールでは南側に急激に基盤層が下がってい

る。堆積する層ははっきりしないが、縄文のプライマリーな層はなく、下層は古代以降に堆積した層、その上に中世以降の層があるが、明確な分層はできない。路盤の直下には近代の道路のために積み上げられた層がある。一部西端に古代の貝層が見られる。

A区では、貝層は見られず、中世以降に堆積したものである。調査区とほぼ平行に基盤が下がっており、伊川津の砂礫堆の南端と考えられる。

西に接する2036-2-2マンホールでは、一部路盤下にかく乱された貝層が存在していたが、縄文晩期後半の貝層も残存していた。貝層下、混貝土層には土器が多く含まれる。また土器が水平に並ぶ面がある。ほぼ1個体であるが、大きな破片の単位が積み重なっていたが、土器棺ではない。

B区では貝層が良好に残存していた。貝層は、純貝層（アサリ主体オニアサリ）、混貝土層（アサリを主体としている。貝も多種含まれ（この貝層の一部が発達しているところは純貝層となっている場所もあり）、黒色土層となっている。

遺構は、人骨の埋葬3、埋葬イヌ2（成犬、幼犬のほか頭部のみ出土あり）、土器棺1、焼土面が2か所見られるである。人骨の散乱（解剖学的な配置を保っていないが、1個体はある）1箇所が確認された。人骨は調査区の外に伸び、危険であるため一部をとりあげたにとどめる。2体が切りあうように検出された埋葬人骨も存在する。遺物は縄文土器(晩期後半)、石器（石鏃・石刀）、貝製腕輪、ヒスイ製・イルカの牙玉、牙製垂飾、等が見つっている。全体的に道具類は少ない。とくに渥美半島の縄文時代に普通に見つかるヤス、根バサミは見つっていない。貝輪が多いのが特徴である。獣骨も多いが、シカ、イノシシが主体である。魚骨は少ない。

土器は多く見ついているものの、粗製の深鉢が大半を占めているため、現在のところそれぞれの層の時期の確定に至っていない。浮線文浅鉢土器から調査区周辺の貝層形成時期は馬見塚式前後と思われる。

調査区東には火葬墓が存在した。軸は南北で、縄文時代の貝層を長楕円形に掘り込んでいる。遺構面は一部赤く焼け灰と骨が充てんされていた。人骨の一部は焼けていない状態のものも含まれている。焼けた六道銭も見ついている。時期は戦国から近世初頭であろう。

2036-2-3マンホールでは、縄文期の貝層がかく乱を受けており、明確ではなかった。中央にB区で見つかったと同様の火葬墓が存在した。西端ではわずかに縄文期の包含層が残っていた。水道の堀方からかく乱を受けた埋葬人骨1個体分が見ついている。

D区については、工事立会いを実施した。縄文の貝層西端はかく乱のため不明であるが、東端にあったのみと考えられる。大半は後世に削られているため基盤層直上に包含層が残っている。埋葬人骨2体、壁から崩落した土砂から頭部1個体（新しい）あった。壁面には土器棺が2基存在した。1基は崩落寸前で取り上げたため十分な記録はとれなかった。粗製の砲弾形の深鉢で、口縁が東南方向を向きほぼ水平に土器片が並んだ状態であった。一部水道工事で削られていたため底部が存在したかは不明である。マンホールから西に10mほどの南壁面からは、晩期末の馬見塚式の土器棺が見ついている。口縁はほぼ南を向けて、水平に埋設されていた。基盤層に埋設土坑の一部は達していたが、黒色土に掘り込まれていたためプランはつかめなかった。底部は存在していな

かった。

10mあたりから33mあたりまで、南に開いた浅い谷状の地形となっていた。上の弥生時代中期、後期の土器がD区東から、見つかっている。貝層は伴っていない。D区は東側に縄文の包含層が見られるが、西側についてはその土層がいつに属するか不明で、推定中世以降に埋められたものと考えられる。この層では保存状態の悪いヒトの下顎、大腿骨片が見つかっている。

C区も工事立会い行った。水道の掘り方の重複、防火水槽でかく乱されているが、それぞれの掘り方で壁面を確認することができた。古代の貝層がC区から西に広がっている。O区にも見られるがかく乱が著しい。アサリを主体とした土壌をまったく含まない純貝層で、ほんのわずか土師器、須恵器が混じる。貝層中には、破碎された貝層が平面的に続くところがあったり、製塩土器が平面的に並んだ場所も見られた。また、西端では貝層中に赤褐色粘質土が混ざる貝層も見られた。時期については遺物が少なくはっきりしないが8世紀代と思われる。

まとめ

今回の調査で、伊川津貝塚の縄文時代の貝層、墓域の広がりを確認することができた。また、古代の貝層や包含層の広がりも確認できた。伊川津集落が立地する砂礫堆の生活は各時代に長く及んでいたことがわかった。縄文時代の貝層は道路下であったため、水道等の破壊以外よく保存されており、各層に含まれる遺物の分析により東海地方の基準となる好資料となる。

古代の貝層については、田原市では初めての調査であり、動物遺体の分析により製塩は言うに及ばず古代の伊川津の人々の生業を明らかにすることができよう。



発掘のよう



縄文時代の貝層



縄文時代晩期初頭の埋葬



中世に埋葬された人骨 成人男性
縄文時代の人ほど丁寧に埋められてい



縄文時代晩期初頭の埋葬された



石で囲まれた炉の跡



見つかった縄文時代晩期初頭の



2/6 泉小学校の生徒の